三重県立桑名北高校

学力向上とキャリア教育

「オール桑北」で学力向上とキャリア教育改革を進め、地域に信頼される学校へ

変革のステップ

背景と課題

- 自己肯定感が低く、学習や進路に対しても後ろ向きな生徒が多かった
- 教師の異動などによって、様々な取り組みが形骸化

実践内容

- **アセスメントの活用の充実**　ベネッセ「基礎力診断テスト」（＊1）を年1回から3回に増やし、学力推移を把握。朝学習の時間での事前指導や、成績下位層の生徒を対象とした事後指導を徹底。また、先輩の成功例を紹介したり、成績上位層の生徒などを表彰したりして、学習意欲や自己肯定感の向上を図る
- **キャリア教育の再構築**　育てたい生徒像から具体的な取り組み、実施方法までを、教師全員が参加してワークショップ形式で検討し、3年間のキャリア教育計画を策定

成果と展望

- 「GTZ」（＊2）がD3の生徒が大幅に減り、就職試験の1次試験合格率も過去最高を記録
- 生徒が進路について前向きに考えるようになり、地元企業からの評価も回復

若手教師の熱意が改革の原動力に

三重県立桑名北高校が、学力向上とキャリア教育の改革に着手したのは、2016年度のことだ。それまでは様々な課題があり、生徒指導に力を入れていたものの大きな改善は見られず、地域の評価も芳しいものではなかった。そのような中、教師は前向きに教育活動に取り組んでいたが、方法については手探りの状態だった。学習や進路選択に前向きに取り組まない生徒も多く、大学入試や就職試験で苦戦を強いられることが常態化していた。2学年主任の森西基雄（もとお）先生は、当時の様子を次のように語る。

「担任として15年度に卒業生を送り出しま

PROFILE

大学進学希望者中心のカレッジクラス、就職を目指すチャレンジクラスの2類型。「総合的な学習の時間『みらい』」、インターンシップ、コミュニケーション力向上のための保育交流など、特徴的な取り組みを展開。

設立	1980（昭和55）年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年240人
2017年度入試合格実績（現浪計）	国立大は、三重大に1人が合格。私立大は、愛知学院大、愛知工業大、金城学院大、鈴鹿医療科学大、中部大、東海学園大、名古屋学院大、名古屋芸術大、名古屋文理大、四日市大などに延べ41人が合格。
住所	〒511-0808　三重県桑名市大字下深谷部字山王2527
電話	0594-29-3610
Web site	http://www.mie-c.ed.jp/hnkuwa/

＊1　GTZ（学習到達ゾーン）という指標で生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性（自我同一性）を測る、ベネッセの生活・学習指導用テスト。
＊2　学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標。「S1」～「D3」の15段階があり、基礎力診断テストでは「A2」～「D3」で評価される。

したが、生徒の力を引き出すというよりも、無事に卒業させることが最優先になっていたという反省がありました。16年度に1学年主任となった時、生徒の力を引き出し、伸ばす指導をしたいと考え、保護者にもその決意を伝えましたが、具体的な改革のイメージは描

三重県立桑名北高校校長
岡田真次 おかだ・しんじ
教職歴33年。同校に赴任して1年目。「生徒の力を引き出し、『自律』への支援を行う」

三重県立桑名北高校
井上和也 いのうえ・かずや
教職歴24年。同校に赴任して2年目。主幹教諭。進路指導部代表。「生徒の可能性を信じ、常に新鮮な気持ちで向き合う」

三重県立桑名北高校
西脇あずさ にしわき・あずさ
教職歴12年。同校に赴任して6年目。進路指導部総合学習担当。「生徒とのかかわりを第一に、よりよい指導を考えていきたい」

三重県立桑名北高校
森西基雄 もりにし・もとお
教職歴9年。同校に赴任して5年目。2学年主任。「何事にも愛と情熱と魂を持って、生徒にぶつかっていく」

三重県立桑名北高校
中村誠一 なかむら・せいいち
教職歴8年。同校に赴任して3年目。1学年主任。「生徒を受け止め、時には叱咤激励し、生徒の心に響く教育を目指す」

三重県立桑名北高校
小林亮司 こばやし・りょうじ
教職歴8年。同校に赴任して4年目。生徒指導主事。「愛と情熱と魂。教師は『気づかせ屋』」

けていませんでした」

そうした折、16年度に同校に赴任してきた主幹教諭の井上和也先生が、5月に行われた校内研修で、前任校での改革事例を紹介した。ベネッセの「基礎力診断テスト」（＊1）を軸に、学力向上のみならず、学校全体の教育の質を高めていったという報告は、多くの若手教師の心に火をつけた。生徒指導主事の小林亮司先生もその1人だった。

「改革と言うと、特別な取り組みを新たに始めて、生徒の気持ちを上向かせるというイメージでしたが、井上先生の前任校での改革は、生徒の毎日の学習をしっかり支えるという取り組みでした。学校生活の根幹は授業であり、生徒の目を学校に向かせるためには、まず授業をきちんと理解させることが最も大切だと言われ、私たちが力を入れるべきことは何か、改めて気づかされました」

そうして、井上先生の話に共感した教師たちを中心に、学力向上とキャリア教育の改革が始まった。

朝学習の時間を有効活用し、事前指導を徹底

まず着手したのは、基礎力診断テストの徹底活用だ。同校では毎年4月に同テストを受験していたが、事前・事後指導や結果分析が十分ではなかった。そこで、事前・事後指導を徹底して行う体制を整えるとともに、短期サイクルで生徒の学力推移を把握し、指導改善にも生かせるよう、9月と1月にも受験することにした。

事前指導は、10分間の朝学習の時間に行うこととした。普段は漢字練習などに充てているが、基礎力診断テスト実施の10日前から「One-Week トライアル」（＊3）に取り組ませ、担任と副担任がチーム・ティーチングで指導する。

さらに、生徒の意識を変えるため、今の時期から頑張って成績を上げ、就職を決めた先輩の話や、基礎力診断テストのGTZ（＊2）がD3だった生徒の多くが就職試験で不採用となったことなどを、企業名を挙げながら説明した。

「今の頑張りが自分の将来に直結していることを、生徒はあまり意識していません。そこで、遅刻や欠席をせず真面目に学習を頑張れば、テストでもよい成績が取れて、自分に自信を持てるようになり、結果的に進路選択にも有利に働いて、未来が開けるということを、全校集会やホームルームなどで繰り返し伝えました」（井上先生）

成績下位層の生徒を対象とした個別指導で生徒の弱点を知る

事後指導では、GTZがD3の生徒を対象とした「D3学習会」を始めた。これは、基礎力診断テストで国数英3教科すべてD3だった生徒を対象に行う補習で、校長以外の全教師がそれぞれ2～3人の生徒を受け持ち、学習チューターとして個別に指導する。期間は約2週間で、

＊3「基礎力診断テスト」に付属している事前、または事後に取り組む学習教材。

日時は学習チューターの教師と生徒が相談して決める。指導の進め方や使用する教材は各教師に任されており、講義形式にしたり、生徒からの質問に答える形式にしたりと多様だ。

1人ずつ日時を決めて指導する場合もあれば、担当生徒をまとめて指導することもある。対象教科は実施回によって異なり、D3だった教科すべてであったり、特に克服したい教科を生徒が自ら指定したりと、適切な方法を模索中だ。初回は16年9月実施分の結果に基づいて17年1月に行い、1・2年生合わせて122人が受講。これまでに3回行った。

取り組みの特徴は、学習チューターの割り当てを、担当学年と異なる学年の生徒とすることだ。生徒と教師がなれ合わず、緊張感を持って学習に取り組ませ、そして、教師側に「オール桑北」で取り組む意識を醸成するねらいがある。

「多くの教師が担当教科以外を教えることになりますが、教科の内容を教えるというよりも、教師が生徒に寄り添い、生徒が質問したくてもできなかった小・中学校段階の学習内容を指導して、つまずきを解きほぐしてほしいと伝えました」（井上先生）

この学習会は、教師が生徒のつまずきの要因に気づく機会にもなった。数学担当の中村誠一先生は、英語を担当した時の経験をこう語る。

「生徒の多くはじっくり学習する習慣が身についておらず、英語の長文問題を見ただけで『もう無理』と言う生徒もいました。考える前に諦めてしまうから、学力もつかないという悪循環に陥っていたのです。そこで、単語を指さしながら一つひとつ質問していったところ、少しずつ答えられるようになっていきました。生徒にとって、丁寧に取り組めばできるようになるという経験になったと思います」

補習を行う一方で、やればできるという達成感や、次は頑張ろうという前向きな思いを持たせるために、表彰制度も充実させた。クラスの成績上位層だけでなく、D3を脱した生徒への「ジャンプ賞」、担任推薦や学年主任推薦の賞など、多彩な賞を設け、多くの生徒が受賞できるようにした（**写真1**）。「私も賞がほしい」「次は絶対に取る」と語る生徒も増えており、高いモチベーションとなっている。

写真1　「基礎力診断テスト」で成績上位だった生徒や、前回よりも伸びた生徒などを、学年集会などで表彰。校章が入ったオリジナルのメダルを授与している。

教師全員で現状を分析し、キャリア教育を見直す

基礎力診断テストの活用と並ぶもう1つの改革の柱は、キャリア教育の見直しだ。同校では、十数年前から、「総合的な学習の時間『みらい』」で、グループワークを通してコミュニケーション能力やソーシャルスキルを身につけるという取り組みを実施してきた。かつては全国的に注目されていたが、長年続けてきたことによる形骸化が見られていた。総合学習担当の西脇あずさ先生は次のように述べる。

「6年前に赴任した当時は、授業前日に何を行うのかを話し合うような状態で、さらに教師の異動が頻繁にあったため、取り組みの理念や指導ノウハウがうまく継承されていないことが課題でした。また、生徒が真剣に取り組まない様子も見られ、効果を疑問視する声もありました」

そこで、16年6月、井上先生を座長に据え、若手教師を中心とした「キャリア教育実行委員会」（現・キャリア教育委員会）を発足させ、高校3年間を見通した指導計画を構築するプロジェクトを始めた。

7月半ばに第1回職員研修を実施。全教師を1班6～7人の計8班に分けて、学校の現状と課題を洗い出した。メンバーは、教科や年齢、勤務歴、性別がなるべく重複しないよう調整。本音で語り合えるよう、班ごとに1つの部屋を

割り当てた。すると、予定の2時間をオーバーするほど議論は白熱し、様々な意見が出された。

キャリア教育委員会が、それらの課題をまとめ、既存の進路学習を「継続すべき取り組み」「廃止すべき取り組み」に整理した。それらを踏まえて、8月の第2回職員研修で、育てたい生徒像や学校をよりよくする方策について話し合った。そこでの内容を再び委員会が集約し、育てたい生徒像を「社会人として適切に意思疎通を図る力を身につける。主体的に学び続ける態度を養い、地域や社会に貢献する」とした。

これを受けて、10月に第3回職員研修を実施。班ごとに、各学年・各学期において必要な取り組みを付箋（ふせん）に書き、模造紙に貼って、3年間の流れをまとめていった（**写真2**）。付箋は、「他校で成功している取り組み」「本校で過去に行った取り組み」などで色分けし、前後のつながりや重複などを考慮しながら整理した。それを、次の委員会で集約し、自校に欠かせない「コアプログラム」として確定。続く、17年1月の第4回職員研修で、各プログラムの具体的な内容や実施方法について検討し、3年間のキャリア教育を体系化した。

写真2　第3回職員研修では、模造紙と付箋を使って、必要な取り組みを各学年・各学期で分類し、3年間の指導の流れを整理した。

「取り組みの枠だけ決めて内容を学年に任せてしまうと、学年によって差が出てしまいます。担当教師が変わる度に方法も変わり、やがて形骸化してしまうでしょう。教師全員で理念から実施方法まで練り上げたことで、納得感や使命感を持って取り組めるようになったと思います」（井上先生）

生徒たちの意欲が企業からの評価を変えた

教師の思いが込められた各教育活動は、生徒の意欲向上にもつながっている。例えば、5月に約100の大学や専門学校、企業を招いて行われた「みらいセミナー」では、生徒は体育館に設けられたブースを積極的に回り、真剣に担当者の話を聞いたり質問したりしていた。かつての同校を知る地元の大学や企業の担当者からは「こんなによい学校になったんですね」「生徒の態度に感動しました」と言われたという。「みらいセミナー」は初めての企画だったが、そうした挑戦は、生徒の自己肯定感を高めつつ、地域の評価も高めるという成果に結びついた。

取り組みの継続・発展と、成績中・上位層への支援が課題

一連の改革は、同校に大きな変化をもたらした。改革前は学年が上がるごとに、基礎力診断テストのD3の生徒が増えるという状況だったが、事前・事後指導を徹底した16年9月以降はD3の生徒が大幅に減り、17年6月に実施した3回目の「D3学習会」では、対象者が68人と1回目の約半数にまで減少した。

さらに、学力向上とキャリア教育の改革が相乗効果を生み、17年度の就職試験の1次試験合格率も過去最高を記録した。教師間には、全校体制で指導にあたる意識が定着し、17年度には全校を挙げて遅刻指導の再徹底が図られ、遅刻者数は1学期段階で例年の半数まで減少した。

今後の課題は、取り組みの継続と成績中・上位層のサポートだと、岡田真次（しんじ）校長は語る。

「18年度から、本校は1クラス少なくなります。教師数も減っていく中で、取り組みをどのように継続し、発展させていくのかを、委員会などで議論しています。また、学力の底上げだけでなく、成績中・上位層を伸ばす指導も考えていかなければなりません。新しい学力観に対応するためにも授業改善の研修を充実し、『オール桑北』で一層の教育力の向上を図っていきたいと考えています」